古田史学の会・東海

東 海 の 古 代

第１６７号　平成２６(２０１４)年7月

会　　長：竹内　強
編集発行：事務局　〒489-0983　瀬戸市苗場町137-10
林　伸禧〈Tel&Fax：0561-82-2140、ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ：furuta_tokai@yahoo.co.jp〉
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ：http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

前号に引き続いて掲載します。
・１６５号(平成２６年５月)
　１．はじめに
・１６６号(平成２６年６月)
　２．有用な知見
　２－１．枯野、軽野
　２－２．『万葉集』の船

金印「漢委奴国王」の読みと意味について（3）

京都市　　黄　當時

３．漢委奴国王

３－１．委(倭)奴

委(倭)奴の読み方には諸説ある。

『国宝事典　新増補改訂版』*1 の「考古　金印(きんいん)」の項では

……　その訓(よ)みについてはなお定説をみない。

(『国宝事典　新増補改訂版』p.283)

とし、『日本大百科全書』*2 の「金印」の項は、次のように説明している。

読み方には諸説あるが、……一八九二年(明治二五)三宅米吉(みやけよねきち)により「漢(かん)の委(わ)(倭)の奴(な)の国王」と読まれ、奴を古代の儺県(なのあがた)、いまの那珂郡に比定されて以来この説が有力である。〈井上幹夫〉

(『日本大百科全書』７、p.194)

しかしながら、「漢委奴国王」をこのように読む（「漢の委の奴の国王」と三段に区切る読み方をする）のは、間違いである。

中国古代の印文は、「授与する側＋授与される側」の二段に区切る読み方をする。金印の下賜は、与える側（漢）と与えられる側（委(倭)奴）の二者の直接の統属関係を示すものであり、ＡのＢのＣという三段服属の関係を示さない。金印の印文は、解析が可能かどうか、という予想や判断にかかわりなく、「漢の委奴の国王」と二段に区切って読むしかないのである。

三段に区切る読み方は、採用するわけにはいかないが、三宅米吉も、二段に区切る読み方で解釈できるものなら、そうしたかったのではないか。三宅説は、基礎の部分で認識に誤りがあり、信用性はないに等しい。そのため、今日なお、異説が唱えられ、それは、今後も幾度となく唱えられることであろう。

多くの学者・研究者が二段に区切る読み方を提唱しているが、最近発表された論文に、大谷

*1　文化庁編『国宝事典　新増補改訂版』便利堂、1976年。
*2　相賀徹夫編集・著作『日本大百科全書』７、小学館、1986年。

光男「金印蛇紐『漢委奴国王』に関する管見」*1 がある。大谷氏は『後漢書』から皇帝が周辺の蛮夷に授けた金印紫綬の史料７例を再検討し

後漢の皇帝が蛮夷諸国に授けた金印紫綬は、一国(国家)に授け、国内の一部族(国)に授けられることはなかった。したがって、問題の金印「漢委奴国王」の読み方で、「カンのワのナのコクオウ」と訓む三宅説は退けられることになる。

（『東洋研究』第179号、pp. 12-14）

と結論付けている。

ただ、遺憾ながら、大谷氏は

金印紫綬は銀印青綬、銅印墨綬と異って、一国の王に授けるのであって、倭奴国が倭国を代表したことになる。よって金印の「委奴国」を記紀と照合すれば、中国の古代音韻論とは矛盾があろうが、「ヤマトの国」と読まざるをえないのではあるまいか。

（『東洋研究』第179号、p. 15）

と述べている。氏の、漢字音を解さず、言葉に対する常識をも欠いた説明はあまりにも乱暴であるが、古代、現代にかかわらず、委(倭)奴という漢字を見せられてヤマトと読む中国人はいないのである。

現時点において、二段に区切る読み方（ＡのＢＣ、漢の倭(委)奴）を採る者であれ、三段に区切る読み方（ＡのＢのＣ、漢の倭(委)の奴）を採る者であれ、倭(委)奴の意味は、まだ正確にわかったわけではなかろう。

難問も、これほどのものになると、ごまかしが露見しにくい。そうすると、倭(委)奴を訓(よ)むくらいであれば、さして難しくないことにもなる。倭(委)を「ワ/わ」と読み、奴を「ド/ど」か「ヌ/ぬ」のいずれかに読み、もっともらしい説明でも適当に付しておけばよい、という発想になりかねない。

先にも触れたが、情報解析では、解析対象が未知（或いは、ほとんど未知）である場合、解析担当者には通常以上の慎重さが求められる。私たちは、解析が可能かどうか、意味が取れるかどうか、という予想や判断にかかわりなく、二段に区切る読み方（ＡのＢＣ、漢の倭(委)奴）を出発点にし、朝貢し印綬を授けられたのは倭(委)奴国、という認識を持って解析を行なうしかない。これで解析できなかった場合は、三段に区切る読み方（ＡのＢのＣ、漢の倭(委)の奴）に急遽転向するのではなく、取り敢えず pending（未決、保留）とし、後日、知恵がついてから再挑戦するしかないのである（三段に区切る読み方で試行的に解析することは否定しない）。

中国側が日本を委(倭)と呼んだ（名付けた）というのは、誤解である。

委(倭)奴は、倭人(委(倭)奴国の使人)が提供した「ワ/わ＋ α」という音声情報を中国の史官が文字情報に変換したもの、と考えるべきである。変換の過程においては、極めて高度な漢字の知識を持つ者が聴取・記録を担当しており、提供された音声情報を忠実に反映する漢字が選ばれたものと考えられる。また、表記を確定する前に、選ばれた漢字が提供された音声情報を正しく反映しているか、確認の過程があったろうことは想像に難くない。

従って、倭人(委(倭)奴国の使人)が提供した音声情報「α」は、当然のことながら、「ナ/な」である可能性はほとんどない。なぜなら、仮に、倭人(委(倭)奴国の使人)が提供した音声情報が「ナ/な」であったならば、聴取・記録担当者は、「ナ/な」という音声情報を伝達するのに最も相応しい漢字（例えば、奈、那）を用いて記録したことであろう。言い換えれば、倭人(委(倭)奴国の使人)が提供した音声情報が「ナ/な」であったならば、聴取・記録担当者の選択肢の中に「奴」という漢字が存在する可能性はほぼない、と考えてよい。

中国の史官には、極めて高度な漢字の知識があり、提供された音声情報がたとえ「ナ/な」であったとしても、それを「奴」という文字情報に変換することは、ほぼありえず、倭人(委(倭)奴国の使人)の提供した音声情報も「ナ/な」ではなかったと考えてよい。

「奴」は、倭人(委(倭)奴国の使人)の提供した「ド/ど、或いは、ヌ/ぬ」という音声情報を

*1　大谷光男「金印蛇紐『漢委奴国王』に関する管見」(『東洋研究』第179号、大東文化大学東洋研究所、2011年。)

文字情報に変換した表記である。私たちには、「奴」を「ナ/な」と読む選択肢はないし、解析が可能かどうか、意味が取れるかどうか、という予想や判断にかかわりなく、「奴」は「ド/ど、或いは、ヌ/ぬ」を示している、という認識で解析せざるをえないのである。

先程、倭人(委(倭)奴国の使人)が提供した音声情報が「ナ/な」であったならば、聴取・記録担当者の選択肢の中に「奴」という漢字が存在する可能性はほぼない、と述べたが、ほぼ、と言うのは、『学研新漢和大字典（普及版)』p. 426が、上古音として、nag、を挙げているからである[301)]。三宅米吉が奴を「ナ/な」と読むことで、古代の儺県（なのあがた）、今の那珂郡に比定し、後に藤堂明保、加納喜光両氏の再構する上古音と一致するのは偶然であった。奴が「ナ/な」を書き記したものではないことは、後でも触れるが、三宅米吉は、「奴」をどうしても「ナ」に読みたいのであれば、三段に区切って「ワのナ」と読むのではなく、二段に区切って「ワナ」と読み、意味を探求するべきであった[302)]。

次に、中国人が日本人を卑しんだ言い方と見る向きがあるが（例えば、先の『学研新漢和大字典（普及版)』p. 117)、その見方は正しいのであろうか。ここで、『新字源』*1『広辞苑』の記述を見ておきたい。

『新字源』

【倭人】(わじん) むかし、中国人が日本人をよんだよび方。

【倭奴】(わど) ＝〔倭・夷〕(わい) むかし、中国人が日本人をいやしめていったよび名。

（『新字源』p68）

『広辞苑』

わ-じん【倭人・和人】中国人が日本人を呼んだ古称。

わ-ど【倭奴】[新唐書(東夷伝、日本)]古代中国人が日本人を称した語。→倭奴国(わどこく)

わ-ぬ【倭奴】⇒わど

（『広辞苑』第五版p. 2871、2876、2877）

『新字源』『広辞苑』ともに、倭人（和人）を、むかし、中国人が日本人をよんだよび方/古称、とするが、この説明が間違いであることは既に述べた。倭(委)奴は、倭人(倭(委)奴国の使人)が提供した「ワ/わ＋ α」という音声情報を中国の史官が文字情報に変換したもの、と考えるべきである。

『新字源』は、倭奴を「わど」一読としているが、奴の字音は、ド（漢)、ヌ（呉）の二音であり（p. 251)、根拠もなく、倭奴は「ワド/わど」一音である、と断定することはできない。一方、『広辞苑』は、倭奴を「わど」「わぬ」とするものの、倭奴国を「わどこく」一読としている。また、『広辞苑』は、倭奴を、古代中国人が日本人を称した語、と奴の字面に囚われて間違った説明をしており、『新字源』はさらに、「むかし、中国人が日本人をいやしめていったよび名」と間違いに輪をかけた説明をしている。要するに、『新字源』『広辞苑』とも、倭奴の意味が正確に取れていないのである。小川環樹、西田太一郎、赤塚忠諸氏、及び新村出氏は、そのような情報をどこから入手したのであろうか。その情報の信頼度は検討されたのであろうか。

漢字は、形音義の三要素からなるが、表意文字に分類されるように、表意力が極めて強いため、漢字を理解する者が、漢字の字形が示唆する意味に囚われずに情報を解析することは、一般に、容易ではない。この問題もそうだが、漢字が表音に用いられている(ことを見抜かねばならない)ケースでも、字形が示唆する意味で解け(た気分になれ)れば、思考がそこで停止する。このような経験は、意識するしないにかかわらず、恐らく誰もが持っているであろう。その結果、漢字表記が行われる以前の日本語の実相を見誤ることが少なからず生じるのである。

後置修飾語が普通に使われているうちは、「倭(委)奴」の構造がわかり、意味が取れるため、何ら問題がなかったが、後に、後置修飾語が使われなくなると、後置修飾語が使われていた時代があったことすら忘れ去られ、人々は、「倭(委)奴」の構造がわからず、意味が取れないため、字面のみを頼りに何とか意味を取るしかなく、「奴」に蔑みの意味があるのではないか、

*1 『新字源』: 小川環樹、西田太一郎、赤塚忠編、角川書店、1968年。

と考えるようになったものと考えられる。根拠なく、倭という字にたけの低い意味がある、と言うのも、付会の域を出ないもの、と見られかねない。

冒頭（１．はじめに）で例示したが、『学研新漢和大字典（普及版）』は、「倭奴」の正確な意味を理解しないまま「ワド」の読みを当て、「昔、中国人が日本人を卑しんでいったことば」と誤った説明をしている。卑しみの意があるかどうか、という点では、奴隷（どれい）や奴婢（ぬひ、どひ）という単語があるから、「ワド/わど」「ワヌ/わぬ」ともに同じである。また、『学研新漢和大字典（普及版）』は、真偽不明なことを平然と記載している辞書の一例に過ぎない、と述べたが、『新字源』『広辞苑』もそうであることは、ご理解いただけよう[303)]。

また、「倭奴」には、「ワド/わど」と読む可能性もあれば、「ワヌ/わぬ」と読む可能性もあるが、『学研新漢和大字典（普及版）』が「ワヌ/わぬ」を採らず、「ワド/わど」を採ったのには何か根拠があるのか、と疑問を呈した。藤堂明保、加納喜光両氏は、根拠もなく、倭奴は「ワド/わど」一音である、と断定するべきではなかった。

例があるとわかりやすいが、例えば、黄という漢字には、オウ、コウの二読があり、可能性だけで言えば、例えば、

黄麻、黄金、黄河

は、それぞれ、

オウマ、コウマ、オウゴン、コウゴン、
オウガ、コウガ

に読めるものの、実際には、黄麻は二読あっても、黄金、黄河は一読しかない。何故その一音に読むのか（黄金、黄河は、何故、オウゴン、コウガに読み、コウゴン、オウガに読まないのか）、という問いには、恐らく習慣であろう、としか説明できないのではないだろうか。

倭(委)奴には、一読（「ワド/わど」「ワヌ/わぬ」のいずれか）と二読（「ワド/わど」「ワヌ/わぬ」の両者）の可能性があるが、忘れ去られた単語であるため（但し、単語そのものは忘れ去られたものの、単語の持つ意味や概念は、気付かれてはいないが、健在である）、一読だったと仮定しても、「ワド/わど」「ワヌ/わぬ」のいずれであったか、さえもわからない。倭(委)奴の意味がわからず、当時の読みの習慣もわからないからである。

押し付けられた呼称は、捨てる自由があれば、捨てればよい。特に、それが気に入らないものなら、なおのこと、さっさと捨てればよい。捨てる自由がなければ、無視して使わないくらいのことはしてもよいのではないか。捨てたければ捨てられるにもかかわらず、気に入らないのにその素振りも見せずに「押し付けられた気に入らない蔑称」なるものを使い続けるほど日本人は柔(やわ)ではなかろう。

和は、倭(委)を書き改めたものであるが、こちらはどのように考えればよいのであろうか。意識するしないにかかわらず、「押し付けられた気に入らない蔑称」なるものが定着してしまったために変更するのもままならず、やむなく倭(委)を表記上だけ和に書き改めて言葉そのものは引き続き使用している、という見方をすることになるが、それで果たして正しいのであろうか。

倭(委)は「押し付けられた気に入らない蔑称」という言説を口にしながらも、その「蔑称」なるもの（の表記改良形式、和）を至る所で胸を張って使い続ける者は、自己の論理や言動の矛盾に気付く必要がある。

倭(委)奴は、上述の通り、自分たちのことを「ワ/わ＋α」と称した人々が提供した音声情報を文字情報に変換したもの（漢字で表記したもの）、と見てよい。中国人がそれらの人々を倭(委)奴と呼んだり名付けたりしたから、その人たちが自分たちのことを倭(委)奴と言うようになったわけではないのである。

そして、和は、倭(委)と表記された単語の表記を書き改めたものではあるが、表記の元になった単語（音声や概念）は、日本人自身が使用していた「ワ/わ」という呼称であり、日本人は、その呼称を引き続き使用している、と見るのが正しい。

ワ/わ/倭(委)/和は、「押し付けられた気に入らない蔑称」などではなく、日本人が元から使

用している由緒ある呼称であり、胸を張って使えばよい。

くどいようだが、長年の広範囲に亘る誤解があるので、「倭」という表記ができる過程を再確認しておきたい。古代日本人は文字を知らなかったために、文字の選定は中国人に任されたが、「ワ/わ」という音声情報は、日本人が中国人に提供したものであり、中国人が音声情報をも日本人に提示したものではない、ということである。そして、中国人は、提供された音声情報に合致する文字を選定したが、選定の基準は、恐らく、提供された音声情報に忠実かどうか、であり、表記を確定する前に、選定された漢字が音声情報を正しく反映しているか、確認の過程があったことは想像に難くない、ということである[304)]。

３－２．加良奴（加良怒）

倭(委)奴を卑字と見る向きもあるが、その見方は正しいのか、倭(委)奴はやむをえない選択の結果ではないのか、は一考の余地があってよいであろう。

漢詩は、作法上、漢字を平と仄に区別し、韻律に基いて配列する。そのきまりは複雑なため、一般に書物で確認しながら作詩するが、最低限守らねばならない規則に、二四不同、二六対、というものがある。二四不同、二六対とは、それぞれ、二字目と四字目の平仄を違える、二字目と六字目の平仄を揃える、という意味である。五言の場合、二四不同、という約束を守ればよい。

かつて、辻本春彦先生は、授業で、唐の詩人李白の秋浦歌（白髪三千丈、縁愁似箇長、不知明鏡裏、何處得秋霜）を取り上げて次のようなことを言われたことがあった。

一丈は、三メートルであり、三千丈は、九千メートル、九キロメートルである。髪を切らなければそこまで長くなるかもしれないが、普通に日常生活ができるはずはない。中国人は何と大袈裟な民族なのか、と日本人は考えているが、李白は大袈裟な中国人だから三千丈と詠った、と考えてよいのであろうか。

この詩の二字目と四字目の平仄は、以下の通りである（平は○、仄は×で示す。以下同じ）。

白髪三千丈　　縁愁似箇長　　不知明鏡裏
何處得秋霜

また、基本数字（便宜上、十は重複して扱う）、単位数字の平仄は、以下の通りである。

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十
十、百、千、万、億

髪の長さを短くしたくても、平仄の規則を守る限り、李白には、三十丈、三百丈の選択肢はなかったのである[305)]。

白髪三千丈の千は、やむをえない選択の一例であるが、ここで、仁徳天皇がある船を詠んだ歌を見ておきたい。ある船とは、今日、通常、枯野(船)と呼ばれる船で、『古事記』（下巻、仁徳天皇）の原文表記は、

加良奴（荻原浅男、鴻巣隼雄、p. 289）、
加良怒（山口佳紀、神野志隆光、p. 304）

である[306)]。

加良奴袁　　からのを　　（枯野を）[307)]
志本爾夜岐　　しほにやき　　（塩に焼き）
斯賀阿麻理　　しがあまり　　（其が余り）
許登爾都久理　　ことにつくり　　（琴に作り）
賀岐比久夜　　かきひくや　　（かき弾くや）
由良能斗能　　ゆらのとの　　（由良の門の）
斗那賀能伊久理爾
　　となかのいくりに　　（門中の海石に）
布礼多都　　ふれたつ　　（触れ立つ）
那豆能紀能　　なづのきの　　（浸漬の木の）
佐夜佐夜　　さやさや　　（さやさや）

（小学館版『古事記　上代歌謡』p. 289）

同一の文書内では、一般に、同一の音声は同一の文字で書き記される。言い換えれば、同一の文書内では、同一の音声を異なる文字で書き記すことはない、と考えてよい。

奴は「ノ/の」とも読めるが、この歌の中では、能を「ノ/の」と読んでいるので（「ノ/の」とい

う音声情報は能という文字情報で書き記されているので)、奴は「ヌ/ぬ」という音声情報を書き記したもの、と考えた方がよかろう[308]。逆に、奴は「ノ/の」という音声情報を書き記したもの、と誤解すると、「ヌ/ぬ」を表記する文字（漢字）がなくなってしまう。また、解析の精度を確保するには、枯野と書き換えたものではなく、原文の加良奴（加良怒）のままの漢字表記に基づいて解析した方がよい。

加良奴（加良怒）は、「からぬ/カラヌ」という音声情報を書き記したもの、と考えた方がよかろう。奴(怒)という文字表記は、当時の聴取・記録担当者には最好の選択肢だった、と考えてよいのではないか。

上述したが、情報解析では、解析対象が未知（或いは、ほとんど未知）である場合、解析担当者には通常以上の慎重さが求められる。解析対象を、真偽を確かめ(られ)ないまま軽々に言い換えたり書き換えたりすることは、解析結果を誤る可能性があり、慎まねばならない。担当者は、解析が可能かどうか、意味が取れるかどうか、という予想や判断にかかわりなく、歌に詠まれたのは加良奴（加良怒)、という情報に基づいて解析を行なうべきである。

異文化の語彙（外来語）は、元の表記をそのまま採用しない限り、新たな表記をする際に揺れが生じやすい。日本語を例に取ると、通信手段の発達した今日でさえ、全国的に“レポート”や“リポート”、“テキスト”や“テクスト”、“グランド”や“グラウンド”の揺れがある。関西で“ヘレ”と言う肉は、関東では“ヒレ”と言うことが多いと聞く。また、一部のレストランでは、“フィレ”とも言っている。「奴」と「怒」の揺れは、元の表記をそのまま採用しなかった（或いは、できなかった）ために生じている。『記』『紀』がそうしなかった（或いは、できなかった）のは、その単語が漢字以外の文字で表記されていたか、文字表記そのものがなかったか、のどちらかである。

『記』『紀』の編纂者は、語部(集団)の提供する情報を該博な知識で記録・編集したが、海の民の言語や文化に関する知識は、その後、急速に失われ、後世の人々は、同じ知識を共有しないため、書かれたことすら理解できない。周辺諸語の知識（装備）なしに、いわゆる日本語一視点の知識（装備）のみで、このような語彙に立ち向かうものではない。

３－３．正確な読解

さて、読めるとは何であろうか。正しい音声で読み、意味が正しく取れる、ということである。例えば、英語で、

There were three houses on the top of the mountain.

は、houses を[hausiz]と読みを間違えても、意味は正しく取れよう。しかし、例えば、中国語で、

前面有家食堂。

は、一字一句を正確に読んでも、前にファミリーレストランがある、と解釈するなら、意味は取れていないことになる。[309]

三宅米吉説は、定説としてほぼ定着したようであるが、残念なことに、この説は、委(倭)奴を読めてもいないし、意味も取れていない。

諸氏は、漢委奴国王をどの程度正確に読解しているのであろうか。

諸氏の手法は、何とか何かに結び付けられる読みがあればその読みを採用する、というものであるが、「倭(委)奴」の意味が正しく取れていない、という点は共通している。そのことは、諸氏自身が薄々気付いていようし、諸氏の説を見聞きする者も薄々気付いていよう。いかなる学者、研究者であれ、pending（未決、保留）や後進に委ねる、という選択肢は、あってしかるべきである。

漢委奴は、二段に区切って読むのが正しく、三段に区切って読むのは間違いである。意味が取れるかどうかにかかわらず、この印（漢委奴国王）だけを例外扱いしてはいけない。また、「奴」の読みも「ド」「ヌ」のいずれか、と考えるべきである。三段に区切る読みを出発点とする三宅説は、言わば宿痾に苦しむかのように、今後もその欠陥にさいなまれ続けるであろう。

私たちは、解析に必要な知識（装備）を入手してきたが、そろそろ、倭(委)奴や奴が何を意味するのか、倭(委)奴や奴は当時の人々が何と言っていた単語を書き記したものであるのか、が理解できるようになったのではないだろうか。

倭(委)奴は、日本人が当時普通に使用してい

た語彙を漢字で表記したもの、と見てよいが、ここで、後置修飾語の例を少し見ておきたい。

フランス語の

Mont Blanc

は、前置修飾語で言うなら、英語の

white mountain

に相当しようし、英語には、

There is something noble about him. や

a friend in need is a friend indeed

のような後置修飾表現もある。中国語の共通語では、“おんどり”、“めんどり”、を、

公鶏、母鶏、

と言うが、南方方言では、後置修飾表現で、

鶏公、鶏母、

と言う。

日本語では、先に例示した（２－２.『万葉集』の船）、

手乃（tau-nui、手-大きい、大きな手、大型の tau。tau は、地域により、田、多と書かれることもある）、

加良奴/加良怒、枯野、軽野（kaulua-nui、加良/枯/軽-大きい、大きな加良/枯/軽、大型の kaulua）

の例がある。なお、kaulua は、唐と書かれることもある[310]。

人名の、彦火火出見尊や比売多多良伊須気余理比売は、長い間（意味はわかっても）構造（の発想）がわからなかったが、

後置修飾型の

彦-火火出見 や比売-多多良伊須気余理 と、

前置修飾型の

火火出見-尊 や 多多良伊須気余理-比売

とが混在して用いられる言語空間（社会）で双方の表現形式を取り入れたハイブリッド表現と考えられる。今日風に言えば、

ミス・トウカイとトウカイ・サン

とを一語に取り込んで、

ミス・トウカイ・サン

と言うようなものである。

異文化の語彙（外来語）は、異文化の語彙（外来語）の知識がなければ、正確に理解できない。

例えば、

「母はほっとにした」

という文章は、一部に異文化の語彙（外来語）が用いられていることを見て取らなければ、間違った文章、手直しの必要な文章と誤解してしまう[311]。また、例えば

「請給我手紙」

という中国語は、日本語の知識だけでは正確に理解することができないし、逆に

「油断一秒、怪我一生」

という日本語は、中国語の知識で何の不自由もなく理解できるが、その理解は日本語の意味とは全くズレたものとなる[312]。

「倭奴」は、「ワ/わ-nui」を書き記したもので、「ワヌ/わぬ」と読み、「倭-大きい」（大きな倭、偉大なる倭）を意味する、と解釈するのが正しい[313]。前置修飾表現が全国を覆うようになると、倭奴が後置修飾表現であることすら理解できなくなってしまったが、「倭」に「奴」を後置する「倭奴」は、「倭(や和)」に「大」を前置する「大倭(や大和)」の前身形であり、意味も全く同じなのである。

奴は、nui という音声情報を正確に反映する文字として、当時の中国側（そして後の日本側）の聴取・記録担当者には最好の選択肢だった、と考えてよい。しかしながら、後置修飾語が用いられなくなると、人々は、奴（nui）の意味（大きい）・用法（後置修飾語）が理解できず、奴を字面（漢字の表意機能）のみで判断するしかなく、卑字ではないか、卑しめの意味があるのではないか、と誤解してしまった。もうおわかりであろうが、奴は、卑字などでは決してなく、あらぬ濡れ衣を着せられた悲劇の好字であった[314]。

金印は、その印文が示す通り、漢が委奴国王に与えた印綬である。かつて委(倭)奴国は日本を象徴する存在であった。元々シンプルな表記で普通に理解できたにもかかわらず、後世の人々が委(倭)奴を理解できなくなったことは、国情の変遷を考える上で示唆的である。日本を代表する国家が後置修飾語を使用し、日本語の基層に後置修飾語の層が存在するのである。

私たちは、漢委奴国王に、日本が経てきた歴史を垣間見ることができる。金印「漢委奴国王」は、委(倭)奴国があったことを私たちに教えてくれている。「首都大学東京」という名称も、日本人の心理の深層に今なお曖昧に受け継がれて

いる後置修飾表現の記憶が発露した例と考えられる。

日本社会は、後置修飾表現を使用する社会から前置修飾表現を使用する社会へと変わり、倭奴という言い方も大倭（後に、大和）へと変わったのである。

４．おわりに

冒頭で（１．はじめに）、私たちを含め、後世の人々は、自分が想像するほど海の民のことを知らない可能性がある、と述べたが、実際のところ、私たちは、無知とも言えるほどに海の民のことを知らない。

金印「漢委奴国王」は、数多くの人々がその考察考証に携わってきたが、未だに決定打がない。私たちを含め、後世の人々は、海の民の言語や文化についての知識を継承しなかったため、委(倭)奴の意味を取ることすらできない。適切な海の民の言語や文化についての知識を欠いたままでは、当然ながら、海の民の言語や文化を適切に理解したり説明したりすることができないのである。

私たちは、先人と同じように漢委奴国王を解析対象としながら、新たに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識、という装備を持つことで、先人が持たなかった視点を持ち、先人が理解できなかったことが理解できるようになった。逆に言えば、仮に、私たちに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識（装備）がなければ、先人と似たようなこと、言い換えれば、奴の意味がわからないまま、第三者からは、牽強付会、と思われかねないようなことしか書けなかったものと思われる。今日の日本語の中に異文化の語彙（外来語）が存在するように、古代の日本語の中にも異文化の語彙（外来語）が存在することが、おわかりいただけたであろう。どの言語にも共通するが、日本語も、一層ではなく、多層なのである。海の民の言語や文化は、日本の言語や文化の基層の一部なのである。古代の日本社会には多様な言語や文化があったこと、即ち、古代の日本社会における言語や文化の多層性は、是非とも視野に入れておきたいものである。

海の民の視点、具体的には、海の民が用いたであろう言語や文化の知識を加えることで、古典の理解や解釈が、より豊かに、より正確になる。私たちは、古代の日本語に取り組むのに、いわゆる日本語の知識にせいぜい中国語や朝鮮語の知識を加えただけのような姿勢でやってきたが、ポリネシア語が解析/研究上考慮すべき言語であることを否定できないことがはっきりしたのである。外来語は想定外だった、と無責任なことを平然と言うのは、やめておきたいものである。

小論では、先達の知見を手掛かりに、さらに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識を入手することで、私たちの視点を海の民の視点に少しでも近づけ、「奴」は nui(大)という音声情報（意味情報を含む）を漢字で書き記したもので「奴」と読むこと、「委(倭)奴」は「委(倭)-奴」の意味構造であること、修飾語は、前置するか後置するかのいずれかしかないが、後置修飾語「奴」を用いれば「ワ/わ-奴」となる単語は、同義の前置修飾語「大」を用いれば「大-ワ/わ」となること、などを解明することができた。

小論は、これまで持つことのなかった、異文化の語彙(外来語)という視点を加えることで幾つかの問題を解くことができた。古代日本語の問題をより正確に解いたり、古典をより正確に理解するのに、外国語、特にポリネシア語等の周辺諸語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

注

301)

『学研新漢和大字典（普及版)』は、倭と奴の発音を、

倭-上古音 uar **中古音・**ua **近古音** uo
現代音 uə

奴-上古音 nag **中古音** no(ndo) **近古音** nu
現代音 nu

（『学研新漢和大字典（普及版)』p. 426）

とする。

302)

比定地は、既発見、発見中、未発見、のいずれかであるが、解析の精度を確保するのであれ

ば、未発見に動揺し、出発点とした(はずの)二段に区切っての解析から急遽転向し、三段に区切る解析を新たな出発点とするのは、論外である。

303)

人間に、ミスや間違いは付き物である。ミスや間違いがあれば、早めに訂正すればよいだけのことであるが、『広辞苑』には、次のような例がある。

日本では、桜の咲く頃に空が薄く曇ることを「花曇り」と言い、春の季語にもなっている。これまでは水蒸気が多いためと考えられていたこの現象は、そのような説明ではもはやいけないらしく、『広辞苑』(第五版) では、水蒸気が多い、という部分を削除している。古人が「花曇り」と考えた現象は、恐らく、水蒸気によるのではなく、どうも黄砂によるらしい、ということがわかったからではないだろうか。

304)

但し、倭人(委(倭)奴国の使人)が漢字を知っていた/書けた可能性や、倭人(委(倭)奴国の使人)が委(倭)奴という文字情報そのものを提供した可能性を排除するものではない。倭人の漢字の知識がどのようなものであったのか、は不明であるが、一丁字を識(し)らなかった、と見るのは間違いであるかもしれない。朝貢が、先進国に対する憧憬を反映したものであるとすれば、倭人が早い時期から漢字の習得に努めた可能性は十分に高く、倭(委)奴は、後漢の光武帝から日本側のリーダー格と扱われたほどであり、漢字を知る使者を手配できたのではないか。

305)

五言絶句仄起(そくおこり)式では、初句の三四五字目は平平仄とするので、三千丈以外の選択肢はない。

306)

荻原浅男、鴻巣隼雄両氏は、「枯野(からの)」に次のように注釈を付している。

応神紀・五年の注記に「軽野(かるの)」の訛語という。速く走る義か、あるいは船材の産地による命名か。良い船材を産した伊豆国の地名としては静岡県三島市修善寺町中狩野の地か。

(小学館版『古事記 上代歌謡』p. 288)

山口佳紀、神野志隆光両氏は、「枯野(からの)」に次のように注釈を付している。

船の名としての意味は未詳。『播磨風土記』逸文に仁徳天皇の飲み水を朝夕運んだ「速鳥」という名の船の話がある。それと関連させつつ、「枯」は「軽」に通じ、船の速さをいうとみる説があるが、『紀』の用字法と合わないので従えない。

(新編小学館版『古事記』p. 305)

307)

「からぬを」という音声情報を書き記したもので、「カラヌを」の意、と理解するのが正しかろう。

308)

「万葉集」では奴はヌ(甲乙はない)にしか使わない。 (講談社学術文庫『万葉集』(一)[*1]、p. 26)

付言すれば、平仮名・片仮名ができた過程から見ても、「奴」は、草書から「ぬ」、右側の旁(つくり)から「ヌ」ができたように、「ヌ/ぬ」が主体である。

309)

中国語の意味は

「前方に(一軒)食堂がある。」

である。

310)

例えば、

津軽 (軽(kaulua、大型船)が利用する津、
　　の後置修飾表現。) vs

唐津 (唐(kaulua、大型船)が利用する津、
　　の前置修飾表現。)

のようなケースがある。

311)

「母は熱いコーヒーをもらうことにした。」

の意。

312)

中国語の意味は、それぞれ、

「どうか私にトイレットペーパーを下さい。」

「油 (の供給) が一秒でも止まったら、私は自分を一生咎めます。」

である。

313)

漢字が表意で用いられているのか、表音で用いられているのか (日本語のカタカナのような

*1 講談社学術文庫『万葉集』(一) : 中西進『万葉集 全訳注原文付』(一)、講談社、1978年。

使い方をしているのか)、はケースバイケースで見るしかないであろうが、参考例を一つ挙げておきたい。

例えば、“熱狗”では、漢字は表意で用いられ、字面が示す通り、“熱い犬”、“ホットドッグ”、の意である(漢字の読み règǒu には意味がない)。

一方、“哀鳳”では、漢字は表音で用いられており、āifèng という読みに意味がある(字面が示す、哀しい鳳には意味がない。アイフォーン、iPhone。アップル社の携帯電話)。

314)

引用の通り、井上氏が nui = large としているが、辞書の説明も挙げておきたい。

nui. nvs. Big, large, great,. . . .

(Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. p. 272)

【参考】

Air Tahiti Nui
航空 タヒチ 大

前回に引き続いて掲載します。

・１５９号(平成２５年１１月)
　１　はじめに
　２　咸亨元年(６７０年)の遣唐使
・１６１号(平成２６年１月)
　３　白雉４年の遣唐使
・１６２号(平成２６年２月)
　４　白雉５年の遣唐使
・１６４号(平成２６年４月)
　５　齊明５年の遣唐使

九州王朝の遣唐使(その5)

名古屋市　　佐藤章司

６、舒明２年の遣唐使

(１)『日本書紀』から

舒明２年の遣唐使関連記事を集めて、舒明２年の遣唐使は九州王朝の派遣した遣唐使であり、大和王朝のそれではないことを下記に検証した。

①　舒明天皇二年(６３０年)、秋八月五日条

大仁犬上君三田耜・大仁薬師恵日を大唐に遣わした。

②　舒明天皇四年(６３２年)秋八月条

大唐は高表仁を遣わして、三田耜を送らせた。共に対馬に泊った。この時、学問僧霊雲、僧旻(みん)及び勝鳥養、新羅の送使らがこれに従った。

③　(同年)冬十月四日条

唐の使者高表仁らが難波津に泊った。大伴連馬養を遣わして、江口に迎えさせた。船三十二艘をそろえ、鼓を打ち、笛を吹き、旗幟を飾って装いを整えた。そして高表仁らに

「唐の天子の遣わされたお使いが、天皇(※原文天皇)の朝廷においでになったと聞き、お迎えさせます。」

とお言葉を伝えると、高表仁は、

「風の吹きすさぶこのような日に、船を装ってお迎え頂きましたこと、うれしくまた恐縮に存じます。」

といった。

難波吉士小槻・大河内直矢伏に命じて先導させ、館の前に案内し、伊岐史乙等・難波吉士八牛を遣わして、客達を伴って館に入らせた。

その日、神酒を賜った。

④(同)五年(６３３年)春一月二十六日条

大唐の客人高表仁らは国に帰った。送使吉士雄摩呂・黒麻呂らは対馬まで送って帰った。

(講談社学術文庫『日本書紀』128・129頁)

此の記事については、

・犬上君三田耜・薬師恵日等の遣唐使の冠位である大仁は『隋書』倭国伝にも記載されている冠

位十二等階であり、九州王朝の制定した冠位制度である。*1

又、使者の薬師恵日は後の白雉五年（６５４年）の遣唐使*2の派遣にあたり、副使として正使高向史玄理と共に唐に渡っている。すなわち、白雉５年の遣唐使も舒明２年の遣唐使も共に九州王朝の派遣した遣唐使である。

・天皇の称号は舒明紀にはなく、もっと後の白村江の戦い以後であり、舒明紀の「天皇」表記は『日本書紀』編纂者の造作である。*3

（２）中国史料からの検証

① **貞観五年（631年）、使を遣わして方物を献す。太宗その道の遠きを矜（あわ）れみ、所司に勅して歳ごとに貢せしむるなし。又新州の刺使高表仁を遣わし、節を持して往いてこれを撫せしむ。表仁、綏遠（すいえん）の才なく、王子と礼を争い、朝命を宣（の）べずして還る。**

② 同上**二十二年**（６４８年）**に至り、また新羅に附し、表を奉じて、以て起居を通す。**

（岩波文庫『旧唐書倭国日本伝 他二遍』35頁）

舒明天皇２年（６３０年）、秋８月に倭国を出発し、翌年、貞観五年（６３１年）に太宗のもとに謁見したのであろう。そして、その返礼として、舒明天皇４年（６３２年）高表仁が筑紫を首都とする倭国に来た。

『旧唐書』では倭国伝と日本国伝が併記されていて、この記事は倭国伝に記述され、倭国は７００年までは九州王朝の時代であるから、高表仁は大和王朝ではなくて九州王朝に来たのである。

高表仁について、『旧唐書』と『日本書紀』を比較すると

風の吹きすさぶこのような日に、船を装ってお迎え頂きましたこと、うれしくまた恐縮に存じます。

（講談社学術文庫『日本書紀』下、129頁）

とあって、ごくごく普通の挨拶文であって『旧唐書』に記すように、倭国の王子と「礼を争った」という様子はないし、『日本書紀』には高表仁と天皇や王子と会見した、とする記事はない。この礼を争うとは倭国の天子と唐の天子が共に「天子」の立場を譲ることができない状況に陥ったのであろうか。『旧唐書』は表仁を**「綏遠（すいえん）の才なく」**と酷評している。

この後、『日本書紀』の記事はあっけなく、高表仁の帰国記事となり、『旧唐書』では倭国の王子と礼を争ったこと、他方『日本書紀』では天皇や王子と会ったとする記事もなく、高表仁と礼を争ったとされる王子に該当する人物もいない。其の記述に一致はない。

舒明２年から４年の高表仁関連記事は、九州王朝史書に記述されていたのだろう。この史書を盗用し、『日本書紀』編纂者の手が加えられ改偏されたのが、上の記述である。九州王朝の実在の隠蔽である。そのために高表仁は筑紫ではなく、大和王朝の都である大和に来たのであると感じられる記述となっているのである。元々は『日本書紀』編纂者は九州王朝の史書を見るまでは、高表仁の来倭など知るはずもなかったのだろう。

この後、唐と倭国間の外交は断絶するが１７年後に新羅を通じて再開されることになる。この間の経過状況など『日本書紀』にその記載はない。

（３）九州王朝と百済国

１）舒明天皇三年（６３１年）三月一日の条

百済王、義慈は王子豊章を人質として送って来た。

*4 （講談社学術文庫『日本書紀』下、128頁）

百済王義慈はこの後、斉明天皇六年（６６０年）に唐と新羅軍のため、捕囚の身となり長安に送られ、百済は滅亡する。

①『日本書紀』齊明天皇六年（６６０年）六月の条（細字）

百済の王義慈、その妻恩古、その子隆、その臣佐平千福・国弁成・孫登ら、すべて五十人余、秋七月十三日、蘇将軍のために捕えられ唐に送られた。

---

*1 拙著「九州王朝の「評と冠位」考）」（『東海の古代』１５０号、平成２５年２月）参照
*2 拙著「九州王朝の遣唐使（その３）」（『東海の古代』１６２号、平成２６年２月）参照
*3 拙著「飛鳥淨御原宮と天皇の称号」（『東海の古代』１５６号、平成２５年８月）参照
*4 岩波文庫『日本書紀』（四）の補注２３で、

なお、義慈王の即位はわが舒明13年であるから、舒明三年條に義慈が王子豊章を貢したとするのはおかしい。豊章は義慈王の子であるが、当時は武王の三十二年で、義慈王は即位していない。

（岩波文庫『日本書紀』（四）、398頁）

と、記している。

（講談社学術文庫『日本書紀』下、214頁）

②『旧唐書』百済国伝、顕慶５年（６６０年）の条

顕慶五年（六六〇年）左衛大将軍、蘇定方、兵を統べて之を討ち、大いに其の国を破る。義慈、及び太子隆、小王孝演、偽将五十八人等を虜にし、京師に送る。上、責めて之をす。

（『九州王朝の論理』*1〈史料〉183頁）

豊章は倭国の支援を得て百済復興を目指すが、白村江の戦いの敗北後、高句麗に逃走し、消息を断ち百済再興の夢は瓦解する。

２）百済救援

斉明天皇７年（６６１年）８月、前軍の将軍大花下安曇比羅夫連・小花下河辺百枝臣・後軍の将軍大花下阿倍引田比羅夫臣・大山上物部連熊・大山上守君大石・大山下狭井連檳榔・小山下秦造田来津らを百済救援のため、同年９月、倭国の人質であった百済王子豊章を百済王にしたうえ、５千人をもって護衛し派兵した。

倭国・百済の連合軍の倭国側の統括責任者が唐に捕囚され、天智天皇１０年（６７１年）に解放されて帰国した筑紫君薩夜麻（薩野馬）であり、倭国（九州王朝）の皇太子又は皇子であったであろう。百済国王との位取からは皇太子がより一層妥当であろう。

『日本書紀』には筑紫君薩夜麻の帰還記事はあるが、出兵（派兵）した時期や状況についての記事は無い。九月以降の文章はこれらを考察して記述したものである。

百済救援とは斉明天皇６年（６６０年）に滅亡した百済を復興させる要請に対する軍事支援だった。

上の派遣された将軍たちの大花下・大山上・大山下の冠位は九州王朝の冠位制度であり、舒明３年記事

百済王、義慈は王子豊章を人質として送って来た。　（講談社学術文庫『日本書紀』下、128頁）

は間違いなく、九州王朝の『史書』からの盗用である。

近畿大和（奈良県ほか）探訪記

名古屋市　　加藤勝美

１　探訪

本会の今年の探訪地は、近畿大和（奈良県ほか）でした。大和は都が平安京に遷る以前の中心的舞台で、古代史を彩るロマンあふれる魅力的な土地柄。

日程は、平成２６年５月２９～３０日の２日間。絶好の天候に恵まれ、素晴らしい旅となりました。

探訪箇所は７カ所。参加者は竹内会長以下８名です。

２　第１日（５月２９日、木曜　晴）

○大神神社（オオミワジンジャ）

■奈良県桜井市三輪

一同が名古屋市金山駅北口に集合して午前９時半頃出発。最初に向かったのがこの大神神社（おおみわじんじゃ）だった。

ＪＲ桜井線の三輪駅の近くに鎮座している。渡されたパンフレットによると、我が国最古の

*1　『九州王朝の論理』：古田武彦、福永晋三、古賀達也著、明石書店、2000年5月

神社であり、祭神は近くに聳える三輪山（標高４６７ｍ）。大和国一ノ宮。うっそうと木々が茂る参道を進んでいくと、荘厳な感覚に包まれる。最古とされる由緒を持つに相応しい風格あふれる神社だった。

○桜井市立埋蔵文化財センター（マイゾウブンカザイ）

■奈良県桜井市芝

非常に立派な埋蔵文化財センターである。埋蔵文化財センターは全国各地に作られているが、その主たる役割は大量に出土される考古遺物の整理と収蔵にある。むろん、当センターも遺物の整理と収蔵は主要業務。が、それと並んで展示スケールが大きく、随分見応えのあるセンターだった。有名な纒向遺跡（まきむくいせき）関連の出土物は土器ばかりでなく、玉、瓦、木製品、埴輪等々多種に及び、豊富な展示内容だった。

○法隆寺（ホウリユウジ）

■奈良県生駒郡斑鳩町

法隆寺は聖徳太子建立の仏寺であるが、いわずと知れた世界最古の木造建築として著名。我が国第１号の世界遺産。私自身、個人的に５年前の２００９年３月に訪問しているので、正面の南大門前に立った時、懐かしい思いに駆られた。同寺は金堂や五重塔を擁する西院伽藍と夢殿を擁する東院伽藍に分かれていて、随分見応えがある。世界最古の木造建築に相応しく、国宝や重要文化財に満ちており、パンフレットによると、指定されたものだけでも２３００余点に達している。時期が時期だったせいか修学旅行生と見られる団体客で賑わっていた。

３　第２日（５月３０日　金曜　晴）

○大阪府立近つ飛鳥博物館（チカツアスカハクブツカン）

■大阪府南河内郡河南町

近つ飛鳥博物館は、大阪府は大阪府でも奈良県との県境に近い山中に設置されている。一須賀古墳群を擁する史跡公園の一画に設置された、いわば史跡博物館。展示室の設計が変わっていて、前方後円墳の形になっている由である。目を引くのが地階展示室（円墳部）に設計された代表的な仁徳天皇陵の模型。遺物で目を引いたのが「大修羅」と呼ばれる巨大な木造運搬用具。よく今日まで腐食喪失しないで遺存したものと驚かずにはいられなかった。このほかにも、豊富な文字資料や多量の銅銭が展示されていて、見所の多い博物館だった。

○大阪府立弥生文化博物館（ヤヨイブンカハクブツカン）

■大阪府和泉市池上町

和泉市池上町に池上曽根史跡公園があるが、博物館はその一画に設置されている。「弥生文化博物館」という名称から伺われるように、弥生時代の生活と文化に重点を置いた珍しい博物館。それを反映してか、弥生住居の実物模型が設置され、生活の様子を人物模型を使って復元した展示がなされていた。また、弥生式土器の変遷を豊富な土器展示でたどっていて、目を引いた。高床倉庫や弥生井戸の復元も展示され、さらに、講演会やコンサートを開催するなど父兄や生徒に親しまれやすい館にすべく務めているのがうかがわれ、従来の博物館を一歩踏み出す意図が感じられた。

○仁徳天皇陵（ニントクテンノウリョウ）

■大阪府堺市堺区

池上町を後に私たちは北上した。仁徳天皇陵に向かうためである。

私の場合、天皇陵についてはこれまであまり関心を抱いてこなかったので、仁徳陵といっても「世界最大級の前方後円墳」くらいの知識しかなかった。ところが現地に到着して驚いたのはその想像を絶する巨大さだった。三重濠の墳墓で、外周は三キロほどにも及ぶ。驚きは規模にとどまらなかった。聞けば、築造には１６年を要し、一日最大２０００人ほど確保できたとすれば、延べ人員は６８０万人に達するという試算もあるという。築造は５世紀前半の由。奈良時代からなんと３００年近くも前にさかのぼる超古代。この途方もない巨大古墳が、げんに目の前に存在しているという事実に衝撃を受けた。学問的には本当に仁徳陵か否か決定されていないようだが、問題は、５世紀前半という超古代に延べ人員６８０万人とも言われる作業人員を１６年もの長期にわたって確保し続けたとすれば、まさに桁違いの権力である。膨大な量

の埴輪群も確認されている。少なくとも、５世紀前半にはすでにこの地に、強大にして強力な大王権力が存在していたに相違ない。この一点を知っただけでも、私には、今回の旅行は大きな成果であった。

堺市博物館（サカイシハクブツカン）

■大阪府堺市堺区

仁徳陵に接するように大仙公園が設置され、その一画に当博物館は設置されている。仁徳陵を含む百舌鳥古墳群に関連する施設で、入館してみると、巨大な古墳丘に大勢の人々が立ち働がく様子を描いた大きな壁画が目に付いた。、それにとどまらない。古代史とは直接結びつかないが、自由都市堺を象徴する海外輸出品として名をはせる堺緞通織（さかいだんつうおり）や特産品打刃なども展示されていた。つまり、地元堺市に密着した博物館であることがうかがわれた。

４　探訪して

以上、今回の近畿大和探訪旅行は、期待に違わぬ有意義、かつ、ロマンあふれる旅となりました。とりわけ、４カ所に及ぶ博物館に足を運んだため、数々の豊富な展示物をまのあたりにして、私には期待以上の収穫だったと受け止めています。もたもたして遅れがちな私を温かく支えて下さった参加者の皆さんに感謝しつつ筆を置きたいと思います。

なお、新たに関心をもたれた方がいつでも再訪できるようにと、所在市町村名を記しておきましたので参考になれば幸いです。

６月例会報告

○「鉄の古代史」Ⅱ

知多郡阿久比町　　竹内　強

阿蘇周辺の弥生遺跡からは大量の鉄製品が出土する。狩尾遺跡群で３１８点、下山西遺跡で１５２点、小野原遺跡群では１０００点以上が出土している。これだけ多くの鉄製品が出土しているにも関わらず鍛冶はやっていたかもしれないが、製鉄はやっていなかった。これらは朝鮮半島あるいは、中国大陸から持ち込んだものであろうというのが定説である。

だとしたら、これらの鉄製品の成分分析を行い実際にどこから持ち込まれたものなのかを調査することは、弥生時代の人々の交流を探るうえでも重要ではないかと考える。そこで新井宏氏（韓国国立慶尚大学の教授）の論考「指標成分の動きからみた古代製鉄」（インターネット）を参考に見てみると不思議なことが判明した。

阿蘇周辺の古代鉄製品にはかなりの量のＶ（バナジュウム）が含まれているが、朝鮮半島あるいは中国大陸の古代鉄製品にはほとんど含まれていないのである。バナジュウムは火山地域の土地や地下水に大量に含まれることが多い、現在では富士山の湧き水に大量に含まれることは有名である。阿蘇周辺の水も同様に含まれている。これは市販されている飲料水の成分表示を見てもわかることである。褐鉄鉱を原料としたポット式製鉄を行ったとき鉄バクテリア代謝生成物にバナジュウムなどの重金属が吸着するためこうした重金属が含まれることになるのだ。だとすると阿蘇周辺では製鉄が行われていた可能性が高いのではないか。

同時にこのことは、北部九州に邪馬壱国が存在したと仮定すれば、これと対抗した国、自ら製鉄を行い強力な力を保持した国、狗奴国であった可能性が高いのではないだろうか。

以上のことを述べた。

○「数」はいくつを指すか－古代史覚書帳－

林　伸禧

朝日新聞平成２６年５月３１日（土）の土曜日版に「数分」「数年」、あるいは「数人」の「数」の定

義についてのエッセーが掲載されていた。

以前、古田武彦氏と白崎昭一郎氏との間に、「数千里」の「数」は具体的にはどの範囲かについて論争があった。古田武彦氏は「五、六千里」、白崎昭一郎氏は、「二～四千里」 と述べていた。

エッセー著者の中村明氏（早稲田大学名誉教授）は、

以前は「五、六」を連想する人が多かったはずなのに、今の若い世代は「三、四」と考える人が多く、「二、三」を思い浮かべる人も少なくない。

と、述べ、数が「五，六」とするのは、

室内の人間も四人までなら一目で数がわかるが、それより多いと一瞬では正確に判断しにくい。元々はそのあたりが「数人」なのだろう。

と、述べられいることを紹介した。

○「繊維街の源流を求めて」

名古屋市　　加藤勝美

現在、会報に連載中で、「繊維街の源流」について私自身の見解を述べるに至っていない中での発言となった。すなわち、発言の用意をしていなかったため、やや尻切れトンボ的な内容になってしまった。私は簡潔に次のような点だけを述べた。

「名古屋市北区黒川付近に繊維関係神社と目される式内社が三社（多奈波太神社、綿神社及び羊神社）も集中しているにもかかわらず、肝心の神社の由緒が極めてあやふやであり、不思議である」と・・・。

○法興年号－古代史覚書帳－

林　伸禧

本誌１６６号に投稿した「法興年号－古代史覚書帳－」を、次のように説明した。

此の年号を用いた王朝は何処かを検討したところ、推測されるのは

① 近畿天皇家
② 九州王朝
③ ①・②以外

の、いずれかと思われる。

①の近畿天皇家については、

・最高権力者である法王大王、上宮法皇は男性、推古天皇は女性である。

②の九州王朝については

・王朝内に『二中歴』年号と法興年号の二種類の年号が並列していた事になるが、一最高権力者に並列して二種類の年号が存在する事例は、中国･朝鮮に存在しない。

③の①・②以外については

・①・②から近畿天皇家・九州王朝以外の王朝の年号と推定される。
・最も有力なのは吉備王朝と推測される。

７ 月 例 会 予 定

日　時： 7月27日（日）午後１時30分～５時
場　所：名古屋市市政資料館（第５集会室）
名古屋市東区白壁１丁目３番地
Tel:052-953-0051
参加料：５００円（会員無料）
交通機関
・地下鉄名城線「市役所」駅下車、東徒歩８分
・名鉄瀬戸線「東大手」駅下車、南徒歩５分
・市バス「市政資料館南」下車、北徒歩５分
・市バス「清水口」から南西へ徒歩８分
・市バス「市役所」から東へ徒歩８分
駐車場
・名古屋市市政資料館：１２台収容(無料)
・ウィルあいち(愛知県女性総合センター)地下駐車場：南隣、有料（３０分１７０円）
・鈴木不動産コインパーク：南東角交差点の東、有料（４０分２００円）

今　後　の　予　定

８月例会：8月10日（日）名古屋市市政資料館
９月例会：9月21日（日）名古屋市市政資料館

例会は、8月は**第2日曜日**、9月は**第3日曜日**です。

古田先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。

例会での研究報告、見解発表は大歓迎です。資料を配付される場合は、「**20部**」ご用意願います。